## 西牧野遺跡（にしまきの）

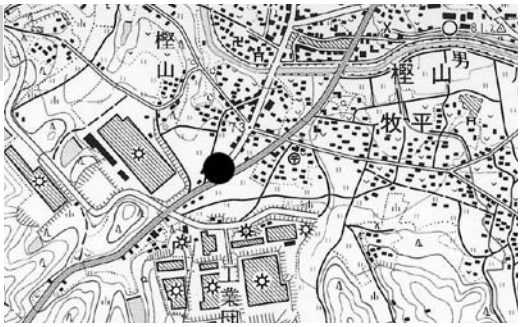
所　在　地　岡崎市樫山町・牧平町
（北緯34度54分53秒　東経137度17分8秒）

調査理由　第二東海自動車道横浜名古屋線

調査期間　平成21年4月～平成22年3月

調査面積　13,440㎡

担　当　者　酒井俊彦・石原真吾・武部真木



調査地点（1/2.5万「御油」）

調査の経過　第二東海自動車道横浜名古屋線の建設に伴う事前調査として、中日本高速道路株式会社より県教育委員会を通じて委託を受けた愛知県埋蔵文化財センターが調査を行った。平成21年度はA～F区の6調査区に分割し、計13,440㎡の面積について行った。

立地と環境　西牧野遺跡は岡崎市東部の丘陵部、樫山・牧平町（旧額田郡額田町）に所在する。一帯は南北約1km、東西約4kmの規模をもつ標高約70～80mの谷底平野であり、ほぼ中央を男川が西流する盆地状地形をなす。遺跡は男川左岸の河岸段丘下位面に立地している。周辺では以前から石鏃や土器が採取されており、旧額田町教育委員会の調査によって牧平遺跡、下堺津遺跡など縄文後期～弥生前期の集落の存在が明らかとなっている。

調査の概要　今回の調査地点は、遺跡東端に位置するA区と西端側のB～F区があり、両端の距離は約550m、西側へ緩やかに傾斜しており標高差は約9mを測る。広範に多数の旧石器が検出されたほか、縄文、弥生、平安時代、中世～近世にわたる複合遺跡であることが判明した。

基本層序は、上から表土（耕作土）、暗灰色（黒色）シルト、灰黄色シルト（～砂質シルト）の順でみられ、黒色土はC区およびB区の北東部で層厚30cm前後の堆積が部分的に認められた。遺構検出は主に灰黄色シルト層上位で行った。

旧石器については、遺構検出面での石器の分布状況をもとに掘削範囲を設定し、下位約80～120cmの深さまで精査を行った。

旧石器時代　旧石器は特にC、D区において多数出土しており、C区で716点、D区では500点を超えると思われる。整理途中であるが、器種は石核（33点）、ナイフ形石器（20点）、掻器・削器（12点）、角錐状石器（3点）、槍先形尖頭器（2点）を確認しており、そのほか剥片石器およびチップが全体の9割近くを占めると思われる。

石材についてみると、点数の多い順から溶結凝灰岩（流紋岩を含む）、黒曜石、チャート、安山岩、下呂石、水晶があり、石核の大半およびチップはすべて溶結凝灰岩である。本遺跡以西の岡崎市、豊田市域の旧石器資料が矢作川流域で採取が可能なチャートが主体であるのとは異なり、また黒曜石が一定量を占める点などが本遺跡の特徴として挙げられよう。それぞれの石材産地として、溶結凝灰岩は本遺跡から東へ約50km離れた鳳来寺山周辺から豊川流域が考えられる。黒曜石資料は球果が少なく透明感があるものが多くみられる。おそらくは信州系の黒曜石が多くを占めているのではと思われる。

旧石器の出土状況は大きく2パターンに分けられる。一つは平面で径約２m程度の範囲内にチップを含む70～100点前後が集中し、これらの検出レベルは高低差10～40cmの幅に収まる。同様の出土状況は計2ヶ所（C区TP.14、D区TP.13）で確認されている。もう一つは広範囲に亘って平面的にも立体的にも散漫に分布する状態である。Cb区南部では明確な集中箇所がみられず、東から西にかけて緩やかに傾斜しつつ疎らに検出された。これ

らは河川性の堆積作用により移動したとみられ、周辺堆積層の検討から集中出土地点の南側にかけて、概ね南東から北西方向に流れた数次の流路跡が想定される。なお、石材別の分布の傾向では、多くの地点において溶結凝灰岩を主体としてその他の石材が僅かに混在するという状況の中で、Cb区南部の地点は溶結凝灰岩を主体としながらも黒曜石の比率が高いという違いが認められた。

分析を行った結果、灰黄色シルト上位から鬼界アカホヤ火山灰が、これより下の大礫層までの間で姶良Tn火山灰（AT）が検出された。本遺跡の旧石器は、これまでAT含有層より下では検出されていないことなどから、約２万5千年前を遡らない資料と考えられる。

A　区　A区は南側丘陵の末端付近にあたり、調査区南側は連続して近世段階に大型の土坑群が掘削され、その後整地が行われるなど大きく改変されている。中央より北側では中世の土壙墓と考えられる土坑２基、山茶碗や土師器皿を含む蛇行する溝などが検出されたが、遺物は全般的に希薄であり、中世段階には一部は墓域であったと考えられる。このうち土壙墓(011ST)は南北方向に長い楕円形を呈し、長軸1.92m、短軸0.6m、深さ約20cm、北側寄りの部分で径14cmの土師器皿(ロクロ成形)と刀子各1点が出土した。

B　区　調査区の中央を南から北へ流れる幅約9m規模の旧河道(220NR)が検出された。近世段階には機能しておらず、水田など耕作地であったとみられる。遺構は黒色土の堆積がみられた旧河道の右岸に集中しており、このうち掘立柱建物跡2棟、方形の竪穴状遺構2基は検出状況等により中世の遺構と考えられる。また、調査区北部では一辺が約10m規模の方形周溝墓1基（011、018、270SD）を確認した。なお、近代の遺構ではあるが、軸線の方向を同じくする一辺3m弱、深さ90cm前後の人力掘削による方形土坑26基が集中して見つかった。灰黄色土層が大きく掘り込まれ、直後に黒色土で短期間に埋められている。用途は不明である。

C　区　縄文時代と思われる直径2.8m規模の円形竪穴建物（291SI）、中世から戦国期の溝、掘立柱建物、方形土坑がある。このうち土坑（368ST）は地下式壙と考えられる。長軸がほぼ南北方向を向く隅丸長方形を呈する。長軸3.4m、短軸1.7m、深さ1.1mの空間からなり、側壁上部には天井の痕跡が認められる。南端に直径約80cmの円筒状の出入口があり、途中に段が設けられている。埋土中～上層でやや大型の板状の礫と常滑産甕片が出土した。

D　区　北東部を除き全体に遺構は希薄であった。縄文時代中期の深鉢を伴う土坑1基（090SK）が単独で検出されたほか、包含層中より無茎石鏃2点が出土した。中世の溝、掘立柱建物、近世の溝、時期不明の土坑などを検出した。溝は耕地を区画したものと思われるが、近世までに方向が変化している。B区の河川流路の変更との関連がうかがわれる。

E　区　E区の西縁に沿って現在の岩田川が流れており、現況の地形は旧河道の痕跡をよく留めていた。検出された旧河道（003、015、023SD）からは少量ながら灰釉陶器碗、皿、長頸瓶のほか完形に近い山茶碗、小皿等が出土した。

F　区　E区と同じく西縁に沿って山茶碗、中世土師質鍋、皿が混じる旧河道が検出された。東側の上段は削平を受け、明確な遺構は検出されなかった。

ま　と　め　今年度は、遺跡の西部及び東端の調査を行い、旧石器時代から江戸時代までの遺構・遺物が検出された。旧石器時代の遺物は、県内では規模、内容とも他にあまり類例のない貴重な成果である。来年度の遺跡東半の調査において、今回の調査結果の検討と調査内容を充実させることが課題である。

（酒井俊彦・石原真吾・武部真木）

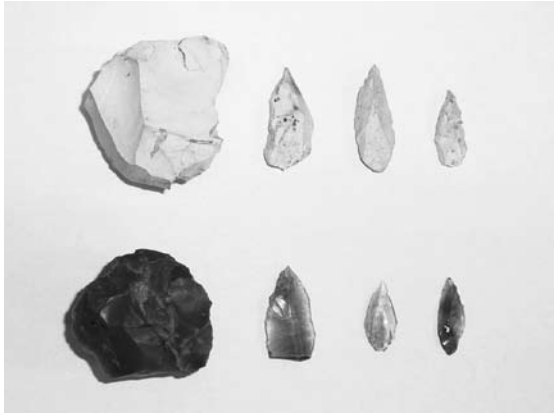
遺跡遠景
（西から、手前の調査区がE区）

011SD
方形周溝墓
018SD
270SD
方形土坑群
（現代）
B区
Y=10750
Y=10700
220NR
～近世
368ST
地下式壙
TP.14
291SI
竪穴建物
Cb区
TP.4
Y=10650
Da区
Cc区
Db区
TP.9,11,13
Y=10600
090SK
縄文中期
E区
旧石器検出範囲（10点以上）
(003,015,023NR)
～中世前期
Y=10650
この位置に現 岩田川
X=-120350
X=-120400

09B･C･D･E区主要遺構配置図（1:1000）

Cb区南部　旧石器出土状況

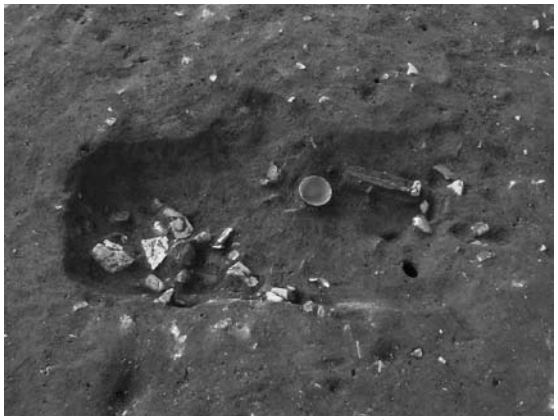
Cb区旧石器出土状況（TP.14）

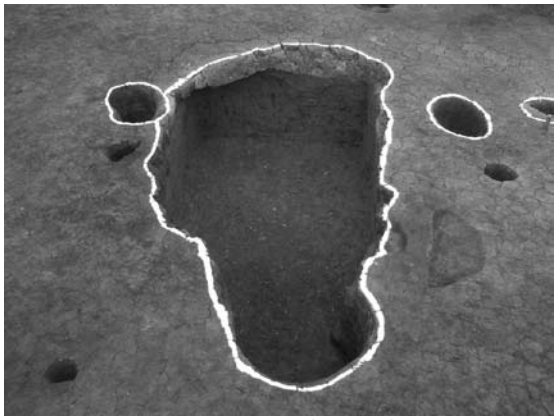

石核とナイフ形石器

Cb区円形竪穴建物（291SI）

Da区縄文土器出土状況（090SK）

Ba区方形周溝墓と現代の撹乱


Aa区土壙墓（011ST）


Cb区地下式壙（368ST）